

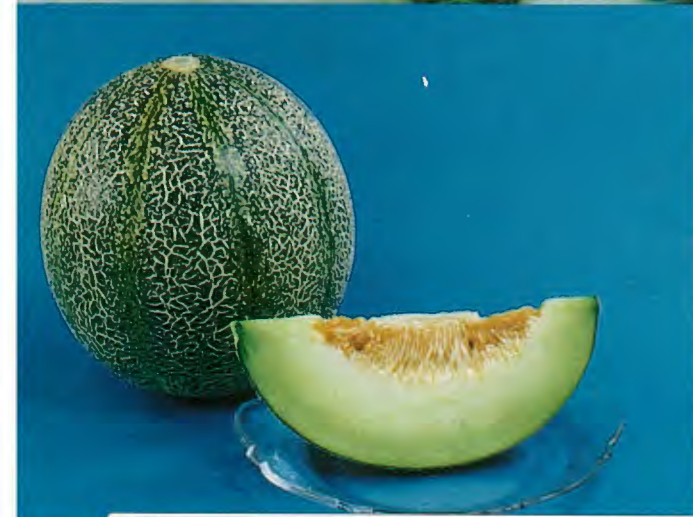
つる割病・うどんこ病抵抗性、安定した食味・輸送性の高い緑肉種

春作立栽培、這栽培・秋作立栽培用

注 つる割病菌レース0, 2に抵抗性
(レース1, 1.2yには罹病性)

ホームメロン FRアムス

特性と栽培方法



第1図 標準作型

地域	月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
九州 西南暖地	種	○												
	定植		○											
東海・関東	種													
	定植			○										
東北 北海道	種													
	定植				○									

○は種 ○定植 ●交配 ○収穫

ホームメロン FRアムス

〈特性と栽培方法〉

育成経過

1974年に発表したアムスは、外観が従来のイメージと異なることから普及するまでに時間を要したが、食味の良さや安定した生産力が認識され、全国で広く栽培されるようになった。しかしつる割病（フザリウム）に対する抵抗性を持っていなかったため、アムスと外観、食味、栽培特性を変えることなく、つる割病の抵抗性のみを付与する方向で育種を進め、1993年にこの目標に到達したので命名発表した。つる割病の抵抗性は園研メロン台木2号の持つ抵抗性因子をアムスの雌親に付与することで得た。

品種特性

- 果形はやや腰高、果重は1.2~1.5kg、果皮は緑色で縦縞があり縞以外の部分にはネットが出る。
- 果肉は厚く緑色で、胎座部は淡橙黄色となる。
- 肉質は収穫後徐々に軟質多汁となり、3日目頃から適食期となる。発酵性はないため適食期は数日間持続する。
- 標準糖度 15~16度
- 成熟期間

○成熟期間	}	九州（4月出荷）	60日前後
		関東（6月出荷）	55日前後
		東北・北海道	50日前後
- 雌花の着生は安定し、低温着果力も強いので蜜蜂交配で安定した着果が得られる。
- へたの離層の発現時が収穫適期で、熟度の揃ったメロンを出荷できる。
- つる割病とうどんこ病に抵抗性。
- 春作と秋作に適応し、各作型で安定した食味のメロンが生産できる。

栽培の要点

■作型と栽培様式 春作はハウス、大型トンネル（被覆資材270cm以上）、秋作はハウスでの栽培を原則とする。春作は這栽培または立栽培、秋作は立栽培とする。（作型は第1図参照）

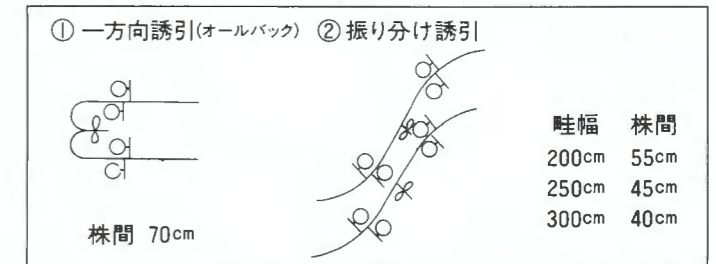
- 春作…這栽培 子づる2本仕立、株4果穫り。
 - 立栽培 親づる1本仕立、株1果または2果穫り、子づる2本仕立、1つる1果(株2果)穫り。
 - 秋作…立栽培 親づる1本仕立、株1果、または子づる2本仕立、1つる1果(株2果)穫り。
- アムスの栽培経験のある場合はそれに準じる。

- 標準施肥量（成分量kg/10a）
- | | |
|------|---------------|
| N |12~15kg |
| P |20~25kg |
| K |15~18kg |
| Ca |70~100kg |
| 完熟堆肥 |2t |

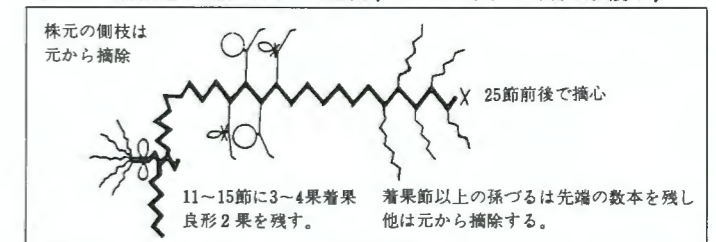
- 誘引方法と株間 第2、3、4図参照。
- 定植時の温度条件 高畦マルチ栽培とし定植時の地温は地下20cmで18℃以上、最低気温10℃以上を維持することが必要。
- 着果方法 蜜蜂交配を原則とし、蜜蜂が使えない場合は筆交配、人工交配とし、ホルモン着果はしない。
- 定植後の温度管理 昼間の気温は30℃前後、最低気温は交配期前まで12~14℃、交配期から果の肥大期15~17℃を目標とする。

- 灌水 鶏卵大からネット発生前までが最も灌水の必要な時期で、肥大の終る開花後40日頃まで適度な灌水が必要。
- 収穫、出荷 開花後日数、果皮色の変化、結果枝の葉枯れ、へたの周囲の黄化等が収穫期の目安となるが、収穫適期はへたの周囲に離層が発現した時である。離層発現から5日間くらいは落果しない。
- 果実の管理 花卉の乾きが遅れると花落部の病気が多くなるので注意する。

第2図 這栽培の誘引方法と株間

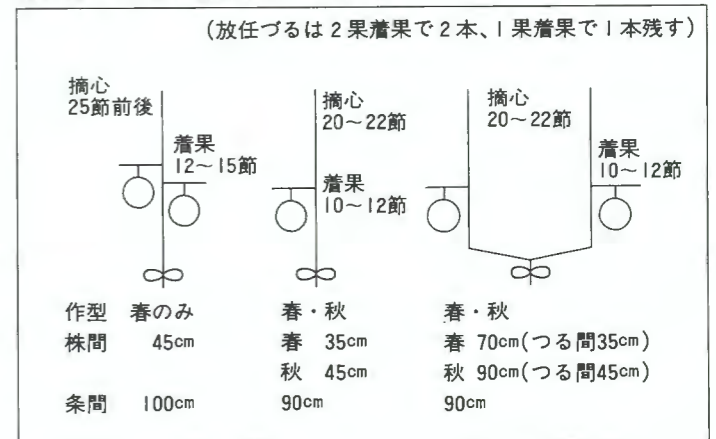


第3図 這栽培の着果節位と整枝（子づる2本仕立、株4果穫り）



- 株元の数葉は交配期前に摘除し通風、日当りを良くする。
- 生育後半に伸びてくる枝で、特に強いものは先を止める程度とし、元から摘除するような強整枝はしない。
- 自然着果した果はその都度摘果する。

第4図 立栽培の整枝方法と株間



公益財団法人 園芸植物育種研究所

〒270-2221 千葉県松戸市紙敷 2-5-1 (2012年10月1日法人名変更)